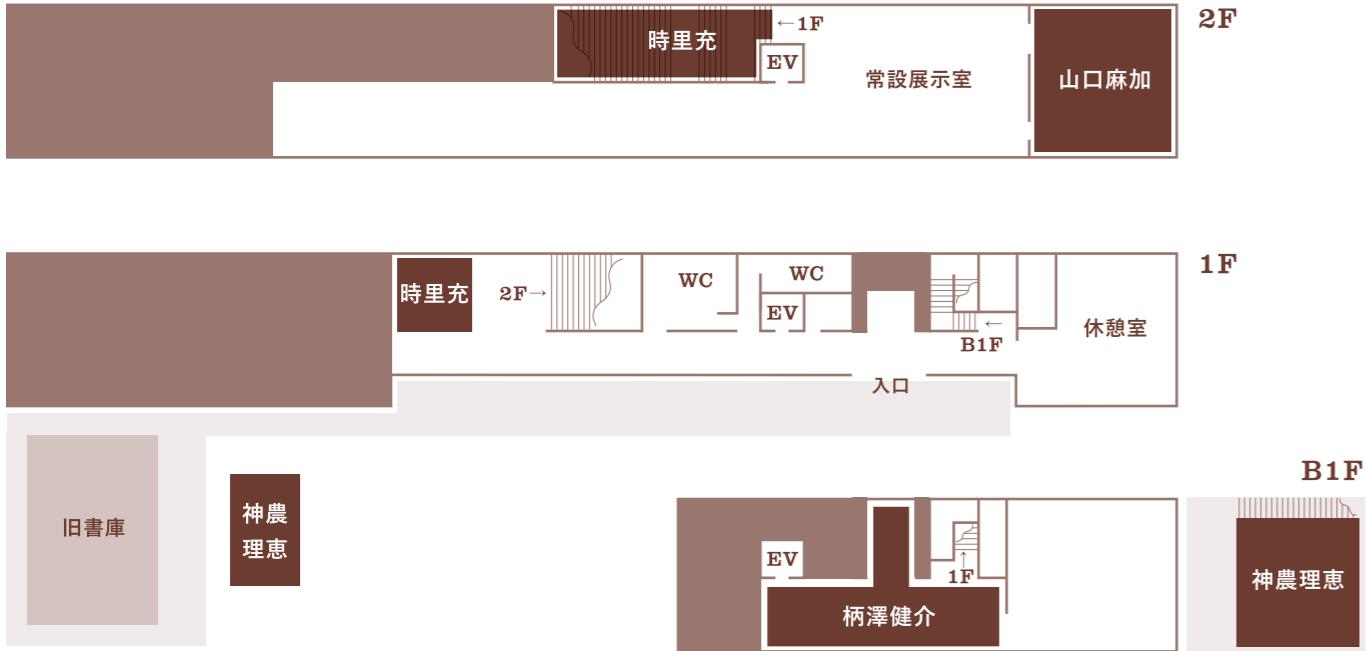


西尾の資産家・岩瀬弥助が、地域文化の向上のため1908(明治41)年に私立図書館として開設。戦後は西尾市が継承し、2003(平成15)年には重要文化財を含む古典籍から近代の実用書まで8万冊余りの蔵書を保存・公開する日本初の「古書の博物館」としてリニューアル開館した。煉瓦造りの旧書庫は国の登録有形文化財。



時里充 Tokisato Mitsuru

1990年兵庫県生まれ

箱庭のような舞台で、ハンドパペットたちが熱心に何かを語り合っています。一つ一つの会話はきちんと成立しているように聞こえますが、全体を通じて何の話をしているのかは、いつまでたっても掴めそうで掴めません。まるで布一枚隔てて何かを触っているような、そんな感覚に陥るかもしれません。時里充は、自らの手の動きをモーションキャプチャーで読み取り、コンピュータ上でシミュレートした布を被せてパペットを生み出しています。また彼らが話している事柄は、現実の空間を3Dスキャンした背景の情報を元にAIが生成したセリフです。現実の世界と映像内の世界とが奇妙に交わりながら、誰のものでもない物語が進んでいきます。

柄澤健介 Karasawa Kensuke

1987年愛知県生まれ

山を一步一步踏みしめ、その表皮を撫でるように確かめながら登り、山の全体を把握しようと試みる。柄澤健介が作るのは、そんな実際の登山体験から得られた山のイメージです。一方で、木を少しずつ彫り進めいくことは、表からは見えていないかたちに向かって、中へ中へと潜っていくような感覚かもしれません。こうした彫刻の内側と外側の感覚を、柄澤は彫って凹んだ部分に白い蠅を流し込むことで、ぐるりと入れ替え可能なものに変えてしまいます。そこにはまた、山を削り、流れ、分岐し、合流し、時に涸れ、地中に潜る、そんな川のイメージも重ねられているはずです。

山口麻加 Yamaguchi Asaka

1991年大阪府生まれ

版画の基本原理は、版の表面の凹凸や孔にインクを置いて、そのかたちを紙に写し取るというものです。この時、版の表面と紙の表面とは鏡写しの関係になっています。山口麻加は、そこからさらに一步踏み込んで、版そのものもまた厚みを持った立体的なものだという事実に着目します。たとえばそこに虫食いの穴があったとしたら？ 版の裏側まで包むよう刷ってみたら？ 西尾市岩瀬文庫に収められた数々の版本もまた、刷られた内容をただ伝えるだけの透明な存在ではなく、多くの人の手に触れ、長い年月を経てきた独特の手触りを帯びています。山口が写し取ろうとしているのは、そのような手触りなのかもしれません。

神農理恵 Shinno Rie

1994年三重県生まれ

まるでカラフルな紙をハサミで思いつくままに切って糊づけしただけに見える、犬の像。そのペーパークラフトのような見かけの軽やかさとは裏腹に、神農理恵の制作プロセスは、火花を散しながら切り出した厚く重い鉄板を、自重とのバランスを考えながら溶接するという、とてもハードなものです。光庭の斜面には、水たまりのようにキラキラと輝く鉄のかけらが連なり、川のようなものを形成しています。矢作川が生み出した沖積平野が広がる西尾の土地のイメージと、鉄が高温で溶け合うオレンジ色のプール(溶融池)のイメージを重ね合わせながら、神農は重厚で軽やかという矛盾した性質を同居させた彫刻を生み出しています。

会場ガイド

やめらかでない しぐれ Unsmooth Gestures

現代美術 in 西尾
Contemporary Art in Nishio

2023.10.14 [土] – 11.5 [日]

9:00–17:00 [休館日 | 月曜日 *西尾市岩瀬文庫は月曜日及び10月19日[木]休館 *林帶芯工場は会期中の土曜日・日曜日のみ開館]
観覧無料（一部プログラムのみ有料）

西尾市岩瀬文庫/康全寺/旧上田家具店/尚古荘不言庵/

西尾市資料館/唯法寺(音楽プログラム)/林帶芯工場(西尾市制70周年記念特別展示)

主催 | 国際芸術祭地域展開事業実行委員会、西尾市

助成 | 文化庁、一般財団法人地域創造

認定 | 公益社団法人企業メセナ協議会

お問い合わせ | 国際芸術祭地域展開事業実行委員会事務局(愛知県文化部文化芸術課国際芸術祭推進室内)

TEL: 052-971-3111 名古屋市東区東桜一丁目13-2 愛知芸術文化センター内

西尾市交流共創部観光文化振興課

TEL: 0563-65-2197 西尾市寄住町下田22番地

協賛 | AZAPA ENGINEERING 河村電器産業株式会社

名古屋競馬株式会社

MEITETSU ニッショード

株式会社三菱UFJ銀行 西尾支店

株式会社愛知銀行 西尾信用金庫 有限会社フクマ

会場協力 | 旧上田家具店 曹洞宗西尾山康全寺 林帶芯工場 唯法寺

協力 | 金山化成株式会社 プリ・テック株式会社



旧上田家具店

西尾城下の商業の中心地だった本町は、明治以降も有力商人らが軒を並べる中心市街地として栄えてきた。本町商店街の老舗の一つ、上田家具店は、2018(平成30)年におよそ80年の歴史に幕を降ろした。間口に対して奥行きのある店舗には、人々の暮らしを支える家具が所狭しと並んでいた。

岡本健児 Okamoto Kenji

1980年愛知県生まれ

目の前にあるモノにまわりついている空気は、それ自体見ることも触ることもできません。しかし岡本健児の絵は、それをこともなげに筆でつかまえているかのようです。自分で綿を育てて綿花を収穫し、糸を紡いで織り上げたキャンバスに、身近な場所で採集した土や貝殻を細かく碎いて練った顔料を塗るなど、岡本はときに絵を描くための材料をも手探りで作り出しています。絵を描くという行為を「描きたいもの」や「描く技術」ありきで考えるのではなく、画材に使えそうな色々なものと、それを握って画面に擦り付ける人の動きの組み合わせとして捉えることで、岡本の絵は確かな手触りを帯びていくのです。

西尾市資料館

西尾市4代市長・杉浦喜之助の遺志で寄附を受け、1977(昭和52)年に西尾城跡に開館した入母屋造瓦葺きの資料館。考古、古文書、標本、民俗など、幅広い資料を通じて西尾市の歴史や文化を紹介しており、郷土学習や小・中学生の歴史学習の場として親しまれている。

大和田俊 Owada Shun

1985年栃木県生まれ

貝類やサンゴ、有孔虫などの海の生き物は、水中に溶けた二酸化炭素を利用して骨格や殻を作ります。石材やセメントの原料となる石灰岩の多くは、こうした生き物の死骸が堆積して形成されます。このような自然のプロセスは、数億年という時間をかけて、われわれ人間には知覚できないほどゆっくりと進行しています。大和田俊は、石灰岩が酸性の水溶液と反応して再び二酸化炭素を放出する性質を利用して、この一連のプロセスを知覚可能な速さへと変換してみせます。発生した二酸化炭素を水に高圧で溶かして製造した炭酸水は、「ごくり」という喉の一瞬の運動と共に体内に取り込まれるか、あるいは賞味期限という人間都合の区切りを経て大気中へ解き放たれていきます。

林帶芯工場(西尾市制70周年記念展示)

*会期中の土曜日及び日曜日のみ開館

古くから綿の生産がさかんな三河地方には紡糸や織布のための工場も多く、なかでも西尾は明治中頃から帯芯(帯の中に入れ硬さを調整する布地)木綿を特産品とした。1918(大正7)年創業の林帶芯工場は、3代にわたって前掛、帯芯、足袋の裏地などを手がけてきた老舗。



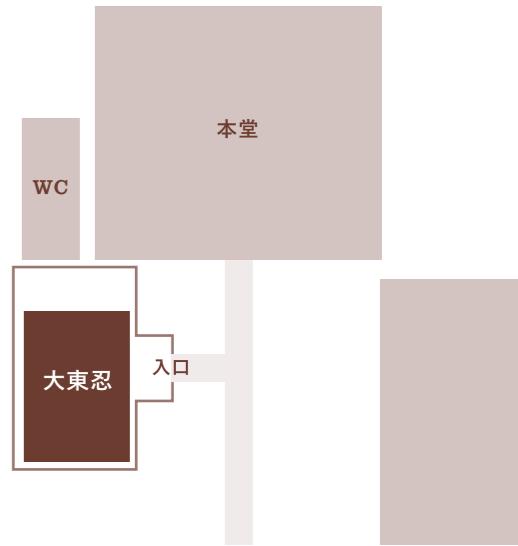
康全寺

曹洞宗の寺院。1221(承久3)年西條城内建立の神宮寺と金剛王院を、1398(応永5)年に吉良山満全寺として復興、1581(天正9)年に村巡見で立ち寄った徳川家康から一字を採って西尾山康全寺と改称した。1585(天正13)年に現在地に移転。禅堂は明治年間に西尾幼稚園として使われ、玄関は西尾郷学校から移築している。

大東忍 Daito Shinobu

1993年愛知県生まれ

日本中のどこにでもありそうな住宅地の静まり返った夜には、ただ生活の気配だけがかすかに漂っています。そんな抜け殻のような景色を舞台に、街灯をスポットライトにして、黒い人影が黙々と踊り続けています。全国各地の盆踊りを訪ね、ひとつの塊になって櫓の周りでうごめく人々を眺め、そして動き動かされるかのようにその中に飛び込んでいく体験を通じて、大東忍はその秩序と混乱の狭間にある状態に強く惹かれるようになりました。西尾の夜をそぞろ歩いては、かつてあったかもしれない祭りの熱気の痕跡を手繕り、自ら踊り確かめながら、大東はその様子を木炭で描き留め、モノクロームのざらざらした夜の光景に包まれた空間を生み出しています。



尚古荘不言庵

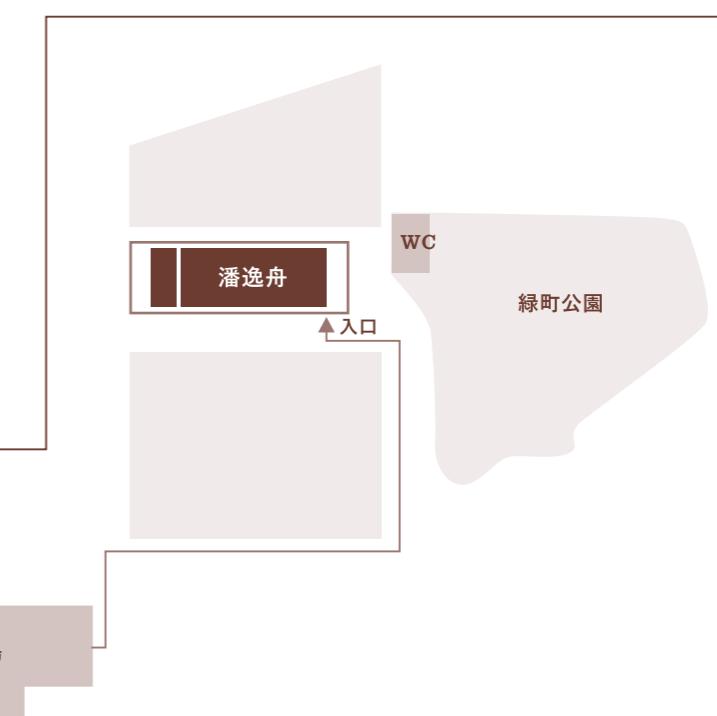
昭和初期に米穀商・岩崎明三郎が西尾城東之丸の遺構の保存のために造営した、日本庭園が美しい別荘・尚古荘。庭園内に移築された不言庵は、元は鍋屋・辻利八の妻・多豆子の茶室で、彼女の和歌の師で幕末明治にかけて活躍した歌人・佐々木弘綱も訪れている。



札本彩子 Fudamoto Ayako

1991年山口県生まれ

札本彩子は独自の手法で制作した食品造形を通して、食を取り巻く社会背景や食文化について考察する作品を制作してきました。細部までリアルに作り込まれた作品群は、本来食品サンプルが持つ「美味しい」要素を超えて、大量消費の問題や食べることに対する人間の欲求などを生々しく想起させます。今回は、近代洋画の父と言われる高橋由一が描いた一連の鮭へのオマージュとして、由一風の鮭3体を吊るした作品を展示します。札本は、以前から由一の油彩画に見られるぼってりとした艶のある表面に食品サンプルと通ずるものを感じており、また過去に鮭の切り身をモチーフにした作品を制作したことから、いつかより大きなスケールで鮭を表現したいという思いがあり、今回の展示に至りました。



潘逸舟 Han Ishu

1987年上海(中国)生まれ

9歳で上海から青森に移住した潘は、言葉や文化の異なる場所で自らの存在や立ち位置を模索し、世界との距離を測っていました。これまでの作品では自分が映像のなかで踊る、歩く、泳ぐことで空間に身体を介入させてきましたが、国際芸術祭「あいち2022」への出品作品《埃から生まれた糸の盆踊り》では空中で舞う糸の動きが、潘の想像力の広がりや空間への介入を弁しています。潘は埃を「蓄積しつづける記憶、溶けない雪、工場の内側を覆う一層の皮膚」といったメタファーとして捉え、工場の機械の音、工場内の日常的な音、潘が部品を叩く音などでそれを包み込んでいます。今回、この作品が再構成され、撮影地である林帶芯工場で上映されます。古い織り機が並び、蓄積された歴史や労働を感じられる工場の中であなたは何を想像するでしょうか。